様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2013～2014
課題番号：２５８８５０５３

研究課題名（和文）国語科における「創作」の学習開発に関する基礎的研究

研究課題名（英文）A fundamental study on learning development of writing in Japanese language arts

研究代表者
中井　悠加（Nakai, Yuka）

広島大学・教育学研究科（研究院）・特任助教

研究者番号：４０７１０７３６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：詩の創作を行う授業において子どもたちの交流の様子に焦点を当て、そこで生じる学習過程を把握するための文献調査・現地調査を行った。特に詩を読む力と書く力の関連指導の内容を分析することによって、次のような点において創作指導の枠組みを見出した。(1)積み重ね(2)集中して書く(3)読み上げ。枠組みの中で、子どもたちの自信と好奇心を育むことが重要であるが、そのためには子どもたちが書く活動に躊躇う必要がないように工夫することの重要性を確認した。また、この研究をもとに英国の研究者と日英の詩教育論の比較研究を発展させるための学習ツール開発計画を立ち上げ、今後の研究の発展につながる足がかりを得ることができた。

研究成果の概要（英文）：This study made a literature and field research to clarify the learning process through children’s exchange activities of teaching poetry writing. Especially, I focused on some poetry lessons associate reading ability with writing ability and found the following framework of teaching writing poetry: (1) Build-up (2) Concentrated writing (3) Reading Back. In this framework, it is important to foster children’s self-confidence and their curiosity to poets’ language preference. It is also important to contrive ways that children do not hesitate to write any poetry to that end.
Finally, through this study, I also got a toehold for a new research plan of developing learning tool with UK researchers to develop comparative research of poetry education in Japan and UK.

研究分野：国語教育学

キーワード：詩教育　詩創作指導　国語教育　イギリス

１．研究開始当初の背景

国語科の新学習指導要領において「創作」が新たに明示され、それに伴って国語科の教科書にも言語活動として物語や詩といった文芸の「創作」が提示されることとなった。しかし、学習指導要領の中ではそれらの「創作」をどう扱ってよいのかということが示されておらず、「創作」の授業についての明確なイメージを持って取り組むことができないという問題が顕在化している。特に学校現場において実践経験の少ない詩の「創作」に関してその傾向は顕著である。従来、わが国の国語科教育論における詩の創作指導は「児童詩教育」として長い歴史と伝統を持っており、詩という形式で書くことによって子どもたちが彼らの生活を豊かにすることができる教育として発展してきた。しかし、その教育観から、詩の創作指導は子どもの見えない心を理解する指導法や生活指導、学級経営の方法として使われ、国語科が担うべき「ことばの教育」とは距離のある領域として扱われてきた。しかし、詩の創作は本来、ことばのあらゆる特性を利用した表現方法によってことば表現の持つ可能性を追い求め続ける行為であり、国語科において詩の創作を扱うことは、あらゆる「表現力」の基礎となる極めて重要な学習となるはずである。

このような問題を克服するために明らかにすべきことは、詩の創作によって子どもたちに育成される力の内実とその学習過程、そして授業という集団学習の中での学習の広がり・深まりである。しかし、日本作文の会によるものを中心とした詩の創作指導に関する文献の大半は授業報告として位置づけられるものであり、「創作」の授業における子どもたちの学習過程を実証的に扱った研究は著しく少ないと言わざるを得ない。

こうした状況を踏まえ申請者は国外での動向を追う中で、詩を創作する時に生じる思考過程を十全にふまえた詩創作指導論が構築されてきていることをイギリスの国語教育論の中に認め、これまで研究を行ってきた。その中では、ことばを操作（選んだり、並びかえたり）することで子どもたちがどのように経験を変化させるかという表現過程とそこで生じる思考過程を強調した理論と方法を探求した。そしてこの「過程重視」の特徴は、個人内でつくられる学びの過程にとどまらず、教室において集団で創作する場を重んじた個人間でつくられる学びの過程へも及んでいることが分かった[2)]。そのため、イギリスでは集団での学習活動を重視し、創作と交流を往還するダイナミックな指導が行われている。これは、「教室において集団で学習する」という、授業の社会的な役割をふまえた詩創作指導論を構築することに不可欠な視点であると考えた。そこで行われる具体的な活動の内実や、それらの中での子どもたちの反応や変化を捉えることで、子どもたちの思考過程にはたらきかける集団学習の方法を解明し、交流を重視した「創作」の学習法の開発を行いたい。新しい学習指導要領に、新たに「創作」が明示され詩の創作指導における目的や方法が見直され始めた今、「授業」の社会的機能と子どもたちの思考過程を十全にふまえた学習方法の開発は急務であると考える。本研究は、これまで行ってきた研究を土台として、実証的な授業理論へと発展させるものである。

２．研究の目的

本研究において、明らかにすべきこととして以下の３点を設定した。

(1) 集団で詩を創作し合う場づくりのための交流場面における学習過程の解明：これまでの研究と前述の背景に基づいて、文献調査および授業観察とその分析を通して、詩の授業における交流場面に見

られる子どもたちの諸反応と、子どもたちの表現の変容にそれらがどのように関わっているかという学習過程を明らかにする。

(2) 詩の創作指導において集団で学習を深めていくための学習ツールの開発：授業において子どもたちの反応や変容を捉えるための授業デザインを作成する。

(3) 作成した授業デザインを詩の「創作」による「表現力」育成のための学習法開発の基礎として位置づけ、「創作」の授業改善にむけた仮説を導き出す。

３．研究の方法

平成 25 年度はイギリスの詩教育論・詩創作指導論・ライティング・ワークショップに関する文献を収集・分析し、詩の授業における具体的な活動の枠組み・詩の創作指導における集団学習方法の基礎理論の枠組みについて検討を行った。それに加えて、イギリス・レスター大学にて行われた PGCE（一年制教職課程）の学生による自分たちのこれまでの作品についてのディスカッション場面・集団での創作およびそれをもとにした交流場面を記録し、実際の授業展開・発話および記述に関するデータを収集し、分析した。

平成 26 年度は、イギリスの最前線で取り組まれる授業論についての情報収集を並行して行いながら、昨年度に引き続き、詩の創作を行う授業において「書く場面」以外の子どもたちの交流の様子（読むこと、話し合うこと、発表し合うことなど）に焦点を当て、そこで生じる学習過程の把握を実現するための調査を行った。それによって、子どもたちのことばの力全体に寄与する詩創作指導の授業としての枠組みを見出した。

４．研究成果

これまでの詩創作指導研究は、何を書くか・どのようなものを書いたかというに主眼が置かれてきており、それは主として子どもたちの個人的活動として扱われてきた. 本研究は、授業の中で個人の表現に大きく影響を及ぼすと考えられる教師・子どもたち同士の「交流」の視座から行ったものである。本研究を通じて、以下のことを明らかにした。

現代のイギリスにおける、詩を読む力と詩を書く力の関連指導の内容を分析することによって、次のような点において詩を読む力に貢献する創作指導の枠組みを見出した。

（１）積み重ねる時間：書く前の段階における様々な刺激となる活動

（２）集中して書く時間：短時間で集中して書く活動

（３）読み上げる時間：自分の書いたものを読んで周りと共有する活動

この中でも「読み上げる時間」を交流の時間と同義と見定め、その活動が作者と読者の平等性を保証するために重要な意義を持つこと、さらにそこで生じる子どもたちどうしの考えや思い・意見の違いといった「摩擦」が子どもたちの思考を促し新しい読みを生みだすことにつながることを見出した。それはつまり、書いたものをお互いに交流することによって子どもたちをひとりの読者として自立させる土台を築くと同時に、彼らを新たな表現（＝それまで書いてきた下書きを変化させること）へと向かわせるのである。またその際、教師が詩を読み、その場で悩み考えながらコメントを付す様子をモデリングすることも子どもたちの活動と学びを促進するために有効な手立てとなることが分かった。

こうした枠組みの中で、子ども達が詩を読む時の意味生成者のひとりとして自分を見なすことができるようになるための基礎を構築することが肝要である。それには、子どもたちが読者として・表現者としての自分自身に対する自分に自信を持つことが前提となる。そしてその上で、詩人のことば選択に対する好奇心を持つことが必要である。「交流」の時

間において前者は育まれ、「積み重ね（＝刺激）」の時間において後者に取り組んで行くことが明らかとなった。

しかし、「交流」することは子どもたちの中に彼らの自信を育む可能性を持つ一方で、そこで自分の書いたものを共有することそのものに躊躇いを感じたり、その躊躇いを予期して書くこと自体に躊躇いを感じたりすることも事実である。それはPGSE課程の学生たちへのインタビューからも明らかとなった。それらの躊躇いを軽減するために、匿名性あるいは交流場面の「演出」など、交流方法そのものに工夫をこらす必要がある。そして、共有しやすくする手立てとしても機能するのが「積み重ね（＝刺激）」の時間にかき立てられる、詩人のことば選択に対する子どもたちの好奇心であった。刺激の方法、詩の創作の方法（ことばの選び方・並べ方）によって、子どもたちを表現に駆り立てるだけでなく共有とその推敲にも導くことができることを改めて確認することになった。

さて、その「詩人のことば選択への好奇心」に関して、イギリスにおける詩教育をめぐる議論はこれまで、詩作品を読むことと子どもたちが詩を書くことというふたつの活動を中心に展開されてきた。しかし近年においては、それら二つの活動を中心としながらも特に注目を集めているのは詩の暗誦指導（＝詠むこと）であるということが明らかとなった。これは、詩の音声的特徴・視覚的特徴としての形式を子どもたちの解釈と表現へと誘う扉としての「意味発生装置」として捉えるイギリス詩教育の大きな特徴として読み取ることができる。他のジャンルにはない詩特有の活動として、子どもたちの学びに対する意義を持つという知見を新たに得ることができた。特にこの暗誦活動はそれ自体が共有することを前提としており、子どもたち自身が彼らの「声」「耳」を十分に使って交流の時間を持つことが「創作」とどのように影響し合うのかということも十分に議論される必要があるだろう。

また、研究を進める中で、言語の違いを問わない日英の詩教育論の比較研究を発展させるための研究交流の機会を得た。子どもたちのリテラシーを育むために詩教育はどのような貢献をすることができるのかということについて、日英両者の専門知識とそれによって子どもたちに生じる学びを共有していくことは、言語教育の新しい道を切り拓くことにつながることは間違いない。そのために研究交流の中で、体験参加型による比較方法としてワークショップの共有による学習ツール開発計画を立ち上げ、今後の研究の発展につながる足がかりを得ることができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
１．山元隆春・中井悠加「詩人の時間を体験する」『月刊国語教育研究』日本国語教育学会 No.498 2013年、pp.64-65、査読無

〔学会発表〕（計１件）
１．中井悠加「読むことと関連した詩創作の授業づくりに関する考察：イギリスにおける所論を手がかりに」第126回全国大学国語教育学会、2014年5月17日、愛知産業労働センター（愛知県）

〔図書〕（計１件）
１．中井悠加「詩の学習指導（中学校）」山元隆春編著『教師教育講座 第12巻 中等国語教育』協同出版、2013年、pp.162-179

６．研究組織
(1)研究代表者
中井　悠加（NAKAI YUKA）
広島大学大学院・教育学研究科・特任助教
研究者番号：40710736